

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370139

研究課題名(和文) フランス中世美術とドミニコ会を中心とする托鉢修道会の関係に関する総合的研究

研究課題名(英文) The Mendicant Order and the Art of the Middle Ages in France: The Role of the Dominicans, c.1300-c.1500

研究代表者

黒岩 三恵 (KUROIWA, Mie)

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：80422351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ゴシックから初期ルネサンス期のフランスを中心に、西欧各地の彩飾時祷書・祈祷集写本を主たる対象として、ドミニコ会士聖トマス・アキナスに関連する祈祷文テキスト並びに彩飾の研究を通じて、当代の平信徒らの信仰の実践の深まりに寄与する視覚イメージの多彩性と機能の重層性の様態を解明し、ひいては中世美術におけるドミニコ会の貢献の一端を明らかにするものである。

最古の作例は、ヴァロワ王族の為に14世紀末のパリに既存の図像を応用して成立した。その後の西欧各地への制作注文地の拡大に伴う図様の多彩化は、平信徒のトマス崇敬がドミニコ会の関与の下、聖体を中心とするトマス神学の記憶に依拠する可能性を示唆する。

研究成果の概要(英文)：The present research focuses principally on a hitherto unexplored aspect of the role played by the Dominican Order in (trans)forming art of the late Middle Ages and early Renaissance through an examination of images and texts venerating Saint Thomas Aquinas found in books of Hours and prayer books produced in France and other parts of Europe.

The earliest of around 50 manuscripts containing either suffrage to Saint Thomas Aquinas or a prayer to the Lord putatively composed by him was made for a member of the Valois dynasty in Paris and dates back to the late fourteenth century. The growing popularity of the saint to other parts of the West and the iconographical variation seen in the manuscripts made until the early sixteenth century suggest that the popularity of the saint derives from the memory of Thomas Aquinas by the lay people as an eminent theologian who elucidated the mystery of the Eucharist and who composed the liturgy of the Corpus Christi.

研究分野：西洋美術史

キーワード：写本彩飾 図像学 ドミニコ会 聖トマス・アキナス キリスト教美術 典礼 時祷書

1. 研究開始当初の背景

研究代表者のパリ彩飾写本研究の過程において14世紀に制作されたドミニコ会士トマス・アクィナスの図像を知ったことが直接の出発点となり、托鉢修道会の一つドミニコ会が中世フランス美術に果たした役割の解明を課題とする意義を認識した。ドミニコ会士のパリ大学での活躍やフランスの貴顕ら芸術庇護者らとの積極的な交流が知られている一方で、フランス美術への直接・間接の寄与に関する研究が、イタリアを筆頭とするヨーロッパの他地域の研究と比較して手薄だという研究状況とともに、写本彩飾の領域では、ドミニコ会の関与を考察の対象とすることが、複数の彩飾写本作例を考察するための新たな枠組みの形成に結びつくことが期待された。すなわち、ドミニコ会士は、テキストの著者、写本の注文主、写本の所有者として彩飾写本の制作と享受に関与しうるだけではなく、聴罪司祭として芸術庇護者の意思決定に助言を与えうる立場にあり、またその影響力のゆえに各種の托鉢修道士図像の源泉たりえる。従来と異なった横断的な枠組みから複数の彩飾写本を研究することで、新知見に結びつくことが予想された。

2. 研究の目的

中世期(13世紀から16世紀まで)フランス美術におけるドミニコ会の寄与を、俗人の芸術庇護者との関係を考慮に入れながら、以下の2点から具体的に解明することが本研究課題の目的である。

(1) パリのドミニコ会の本拠サン=ジャック大修道院の建築、装飾ならびにドミニコ会フランス管区の美術に対する規則等を明らかにすること。

(2) 主として平信徒が所有する時祷書・私的祈禱集の彩飾写本を対象として、写本中に収録されるドミニコ会出身の聖人への崇敬の様態を祈禱文と挿絵画像の関係から解明すること。

3. 研究の方法

(1) サン=ジャック大修道院に関連する研究の方法

資料の収集 ドミニコ会に関連する二次資料、サン=ジャック大修道院に関連する一次資料、画像資料、パリの記念碑的美術に関するモンフォコン、ゲニエール、ミランらに代表される近代初期以来の論考を中心とする二次資料、ドミニコ会を主とした托鉢修道会に関連する専門学術論文を中心とする先行研究、の四つに大別される資料を、パリ、ソシュワール図書館、フランス国立図書館等での調査を通じて収集する。

資料の分析と考察 上記にみるような多様な資料に散見されるサン=ジャック大修道院に関する記述や画像を検討したうえで、これらの部分的な情報を総合して、同大修道院

の建築・装飾の復元を批判的に行う。

総括 上記で得られた復元の仮説を手がかりとして、フランス管区ドミニコ会の美術庇護への関与の度合いと実情を、華麗な宮廷文化の文脈の中で美術庇護と教会への寄進を積極的に行ってきた王侯の宮廷を中心とする平信徒との交流を考慮に入れながら、多角的に考察する。

(2) 彩飾写本を対象とする研究の方法

以下に記述するからを予備研究の段階として、ならびににおいて、事例研究を通じてドミニコ会とフランス中世美術との関係の解明を行う。

作例リストの作成：写本作例を所蔵する各国の図書館・美術館が発行する紙媒体ならびにオンラインの写本カタログや画像データベースの閲覧を通じて作成する。なお、相互の影響関係などの比較対象とする意味からも、リスト化対象の写本作例の制作地は、イタリア、ネーデルラント、ドイツ、スペイン等のフランス以外の西欧諸国も含める。

作例の調査： においてリストアップされた写本の調査を行う。

個別の写本の写本学的知見の整理：個別の写本作例に関し、写本の来歴、写本全体の外観を総合的に分析する写本学的な観点から、装丁、折丁構成、罫線・余白等のページ・レイアウト等の項目を整理する。文献学・典拠研究等の成果を参照しながら、掲載テキストに関する知見もこの段階において整理する。

個別写本の彩飾の体系的な構造に関する知見の整理： で整理された写本学的な知見と照合しながら、個別の写本全体の彩飾プログラムの位階的な構造、個々の彩飾画家の制作の実情、複数の彩飾画家・工房間の分担ならびに共同制作の実情、後補の有無などの観点から分析と知見の整理を行う。

ドミニコ会に関連する彩飾部分の分析： 個別写本の彩飾において、ドミニコ会士の図像を含む彩飾など直接的な表現を持つ部分に特に注目して、図像学的な分析を行う。

総括 上記からの研究の段階を経て、で記述したような基準によって設定された写本のグループ全体を総括し、フランス美術にドミニコ会がいかなる寄与を行ったのか、事例研究を通じた仮説を提示する。

4. 研究成果

(1) サン=ジャック大修道院関連の成果 平成26年度に集中して研究を行い、以下のような成果を得た。

以下の一次資料に関連する情報を収集した。フランス国立古文書館の所蔵文書目録 *Etat des Inventaires* 第1巻ならびに第4巻を中心として、中世期フランス王家を中心とする文書の中から、サン=ジャック大修道院に関連する資料、平信徒の寄進行為などに関連する可能性のある資料などを検索した。フランス管区のパリ以外の地方のドミニコ会修道院に関する文書の存在を確認できた一

方、サン=ジャック大修道院関連の文書は確認に至っていない。他方、14世紀から16世紀の王侯の会計記録、死後財産目録、遺言書、教会を含む各種施設に対する文書の存在については相当数が確認できた。オックスフォード大学付属ボドリアン図書館ならびにフランス国立図書館のオンライン画像データベース上のゲニエール素描集の検索により、ゲニエールが収集したサン=ジャック大修道院内に安置された墓碑に関する資料を確認することができた。

二次資料の収集と得られた情報、ミラン、モンフォコンらの著作から17世紀後半から18世紀末までのサン=ジャック大修道院の外観および内部の墓碑を中心とする装飾について限定的ながらある程度の精度で復元を試みるための画像を中心とする資料を得ることができた。他方、1220年前後のドミニコ会の設立当初の理念とパリのサン=ジャック大修道院の建設状況についても、ドミニコ会に関する専門雑誌論文等で歴史的な先行研究の存在が確認された。しかし、同会設立から1世紀程度経過した後、ゴシック期後期からルネサンス期にかけての時代にフランス管区でもイタリア管区におけるような美術と私有財産をめぐる規則の転換があったのかどうかを知ることは、同会のフランス美術における寄与を研究するうえで極めて重要な問題であるにもかかわらず、十分な資料を確認することはできなかった。かねてからフランス管区ドミニコ会の管区規則や会議事録等の文献史料は、フランス革命以後同会の解散の過程で消失したとされてきたが、研究の現状では新たな資料を確認するに至っていない。

(2)ドミニコ会士の画像を含む彩飾写本に関連する研究成果

時祷書と私的祈祷集の彩飾写本を対象として、ドミニクス、ヴェローナのペトルス、トマス・アキナスらドミニコ会初期の3大聖人の画像などの彩飾の特徴について、調査した。

その結果、トマス・アキナスの画像が、時祷書・私的祈祷集の内容が必ずしも所有者・注文主のドミニコ会への傾倒を示さないような作例でも相当数確認できるという、当初の予想とは異なる結果を認めるに至った。ドミニクスやヴェローナのペトルスの画像は、当初の予想に近い制作の実情を示し、作例の総数も少ない。比較してトマス・アキナスの画像は、フランス以外の写本も調査の対象に加えると10倍に当たる50点近い作例に確認された。

研究の初年度である平成25年度には、約45点のトマス・アキナス画像を含む写本作例の所在を上記3.の研究方法により明らかにし、トマス画像の特徴の解説を含む簡易カタログを研究成果として論文にまとめた。その過程において、謎の多い傑作『トリノ・ミラノ時祷書』のヤン・ファン・エイク様式

のトマス・アキナス像が、挿絵下に続く祈祷文テキストを軽視した20世紀初頭のデュリュ以来、聖人請願の画像とされてきたのを誤りと指摘し、トマス作詞の祈祷文との関連を明らかにすることで、同時祈祷書の1380年代から1420年代までの所有者の変遷と制作過程の研究に一石を投じた。また、ツールズならびにアヴィニョンの市立図書館において調査を行った結果、両図書館にはトマス・アキナス画像と2種の式文に関連する作例がアヴィニョンに1点確認されるのみであることが明らかとなった。現存最古の作例がヴァロワ王家の構成員によって1370年代に入って制作されたことと総合すれば、フランス北部が中心となって日常のプライベートな信仰の実践においてトマス・アキナス作詞の祈祷文に積極的な意義を見出す新たな信仰形態が誕生したと仮定しうる。なお、1323年の列聖からおよそ半世紀後に、パリを中心とするフランス北部を中心に、トマス・アキナスの祈祷文が流行した契機や理由の解明は今後の課題である。

第二年にあたる平成26年度には、1370年代のフランス管区でトマス・アキナスへの関心が高まった理由を解明することも目的とし、現存最古の『ベリー公の時祷書』⁵や遅れる『対抗教皇クレメンス7世の私的祈祷集』⁶、1430年代に制作され、ベリー公の時祷書と画像上の影響関係を持つ可能性のある『ブルターニュ公ピエール2世の時祷書』⁷の3点について重点的に調査・分析を行った。仮説段階ながら、ベリー公の時祷書の場合は聴罪司祭の教導、対抗教皇クレメンス7世の場合は、教皇庁という場の影響と郷里サヴォワ伯の宮廷の伝統、ブルターニュ公ピエール2世の場合は、パリからフランス地方への美術や信仰実践の流行の波及や王族とブルターニュ公の対抗意識が指摘できた。また、オランダ国立図書館のオンライン画像データベースを利用し、15世紀後半にブルゴーニュ公フィリップ3世善良が、祖父フィリップ2世豪胆公が1370年代に注文した『大時祷書』を底本に、当世風に再編しながら宮廷彩飾写本画家ジャン・ル・タヴェルニエらに彩飾をさせた『フィリップ善良公の時祷書』について予備的な分析を行い、同時祈祷書が収録するトマス・アキナス作祈祷文の挿絵の主題が《キリストの洗礼》である点に注目して、写本学と画像学的方法を柱とする研究報告を行った。福音書の記述を典拠として父なる神から聖霊が、ヨルダン川に浸る肉体もあらわなイエスに下される瞬間を描く《キリストの洗礼図》が、彩飾画家のミスによって描かれてしまったものではなく、トマスが作詞し「お授けください慈悲深き神よ(Concede michi misericors Deus)」と祈りを捧げる対象が三位一体の神であることを視覚化する意図がある、とするのが発表の骨子である。同時に三位一体と聖体について

神学上の重要な貢献をなしたトマス・アクィナスのひととなりを間接的に喚起する、洗練された図像の利用とする仮説を提示した。

研究最終年度にあたる平成27年度は、前年平成26年度に精査した『ペリー公の小時禱書』と『対抗教皇クレメンス7世の祈禱書』に関し、詳細な祈禱文テキスト構成と彩飾のプログラム、彩飾画家の分担を表形式にまとめ、両者を比較する研究論文を発表した。実地調査は、前年平成26年度に行った研究報告の対象であった『フィリップ善良公の時禱書』の底本であり、テキスト構成の複雑さはペリー公の写本とも肩を並べる、ブルゴーニュ公フィリップ2世豪胆が注文し、今日ベルギーとイギリスに3巻に分かれて分蔵される『フィリップ豪胆公の大時禱書』の調査を中心に行った。収録する祈禱文や式文の種類については、すでに先行研究においてペリー公によって注文された上述の『ペリー公の小時禱書』や『ペリー公のいともしき時禱書(トリノ・ミラノ時禱書含む)』との強い類似が指摘されてきた。『フィリップ豪胆公の大時禱書』3巻の実地調査によって、同時禱書のトマス・アクィナスへの請願式文の図像と、トマス・アクィナス作詞の祈禱文の彩飾がペリー公や対抗教皇クレメンス7世の写本と比較して、何ら新味がなく、パリの写本彩飾の伝統を踏襲した簡素なものであることを確認した。その構想が1370年代と推定可能な『ペリー公の小時禱書』の凝った挿絵と比較すると、フィリップ豪胆公の写本がパリにおけるトマス・アクィナス崇敬の最も早い作例と捉えることが可能であると思われる。

(3) 海外を含む研究の意義

写本彩飾に見るトマス・アクィナス図像の研究は、海外を含めて手付かずの状態である。最近の時禱書研究の動向も考慮しながらトマス・アクィナス図像と随伴する祈禱文を検討したところ、作例の半数において、聖人請願の式文とは別に、トマス・アクィナスを作者と明記する祈禱文“Concede michi misericors Deus(お授けください慈悲深き神よ)”が認められた。同祈禱文は、トマス・アクィナス研究者の間では知られているが、美術史研究者が稀に気がつくようになったのは21世紀に入ってからである。したがって本研究が、正面から同祈禱文とトマス・アクィナスの図像との関係をあつかう最初のものといえる。本研究の意義は、研究が手薄であった領域を補うだけでなく、聖人にとりなしを請願する式文とは別個の、聖人が生前日常的に唱えた祈禱文を時禱書・私的祈禱集の読者も唱えることで聖人を模倣するという、これまで知られてこなかった聖人崇敬のあり方に焦点を当て、祈りの実践における画像の機能について新たな手掛かりを提供するものなのである。

(4) 今後の課題と展望

今後の研究課題としては、上述のとおり研究期間を通じてリストアップした、50点近

い作例について詳細な個別研究を続行することがまず挙げられる。その際、以下の4点の課題の解明が重要と判断する。第一に、トマス・アクィナス作祈禱文を掲載する時禱書・私的祈禱集が、ミサの式次第にしたがって唱えるべき祈禱文、父なる神、子なる神、聖霊なる神、三位一体の神への誓願式文という、あまり例のない一群の祈禱文も収録することが、トマス・アクィナスへの関心の高まりとも関係するのか、という課題である。第二点は、リストアップされた時禱書・私的祈禱集写本のうち、ネーデルラントで制作された写本が関係する。同地域で制作された写本では、聖トマス・アクィナスが聖体とカリスを捧げ持つ図像で表現される。聖人図像のローカルなヴァリエーションとしてのみ捉えるには、トマスが持つアトリビュートはあまりに意味深長だと考えられる。聖体というカトリック教会にとって普遍的な教義と新しい典礼をトマス・アクィナスが深めたというその功績の記憶が、トマス・アクィナス崇敬が14世紀後半に高まったきっかけと仮定することも可能である。以上から、聖体とカリスを持つトマス・アクィナス像の図像解釈学的な研究は意義深いものと判断する。第三の課題は、トマス・アクィナスを中心とする中世末期の聖人崇敬と「記憶」の問題にかかわるものである。オランダ語圏の歴史学者が人類学的な社会史の領域で行ってきたメモリア研究と、ドイツの研究者が人類学、死生学的な観点から進めてきた記憶研究を参照しながら、トマス・アクィナス崇敬が高まった中世末期の聖人信仰の特性を新しい角度から解釈する道筋が開かれることが期待される。第四の課題は、中世末期における聖体の信仰の特性に関連するものである。狭義においては、上述のネーデルラント美術にみるトマス・アクィナス図像の研究の延長上に位置するが、同時に、ブルゴーニュ公国の都デジョンの出血するホスティア信仰と図像の隆盛などとも連なる、広範なキリスト教図像の領域に関わる問題である。トマス・アクィナスを筆頭とするドミニコ会の神学者・思想家を超えた、広くそして深いキリスト教神学の問題へとつながる点は、本研究の課題の一つであるフランス美術とドミニコ会の関係という枠を大きく逸脱するスケールを有するものとして注意する必要があるが、リエージュのジャンヌ・ド・コルミヨン、トマス・アクィナス等による聖体論、1264年にウルバヌス4世が制定した聖体の祝日、中世末期に新しく登場した聖体の図像を研究することを通じて、図像の典拠、教義の面でドミニコ会の思想家たちが果たした役割を具体的に明らかにする新たな図像と研究の領域となることが予想される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

黒岩 三恵「芸術庇護と信仰の私的实践とドミニコ会(1) 『ベリー公の小さき時祷書』と『対抗教皇クレメンス7世の祈祷書』の場合」『ことば・文化・コミュニケーション』査読無し、第8巻、2016、1-29.

黒岩 三恵、「私的祈祷書類におけるイメージ機能の諸相：聖トマス・アクィナス図像と祈祷文の問題を中心に」『ことば・文化・コミュニケーション』査読無し、第6巻、2014、49-86.

〔学会発表〕(計 4 件)

黒岩 三恵、「時祷書の彩飾：ルネサンス期の作例に見る装飾性、絵画性、記号性の問題を中心として」総合学術文化学会、2016年3月11日、亜細亜大学(東京都・武蔵野市)

黒岩 三恵「聖トマス・アクィナスとメモリア フランスの彩飾写本にみる視像と聖人崇敬」関西フランス史研究会、2016年1月9日、京都大学(京都府・京都市)

黒岩 三恵、「私的祈祷文集写本における聖書図像 中世末期の信仰の実践とのかかわりから」新約聖書図像研究会、2014年12月23日、立教大学(東京都・豊島区)

黒岩 三恵(Kuroiwa, Mie), Saint Thomas D'Aquin et la priere: Texte, images et pratiques de devotion privee dans les livres de prieres enluminees, Rencontre du Centre Andre Chastel, 2014年3月12日、Centre Andre Chastel, Paris(France).

6. 研究組織

(1)研究代表者

黒岩 三恵 (KUROIWA, Mie)

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：80422351

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：